
じゃらねっとのシンガポール

じゃらねっと

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

じゃらねっとのシンガポール

【コード】

N0071C

【作者名】

じゃらねっど

【あらすじ】

ハワイに突如行けなくなったじゃらねっど一家のシンガポール奮

戦記

第1章 1、悪夢

1. プロローグ

年末が迫った12月初め事件は起こった。

苦勞して何ヶ月も前に12月27日からのハワイ旅行を申し込み3世代旅行に今年も出かけられるとウキウキし、そろそろ旅行の準備に取りかかるうとしていた矢先だった。

この旅行には私、主人、娘（ゆり〜）、じゃらねつとの両親の5人で行く事になっていた。

その中のぱんが

「休むはずだった28日に急に仕事に出なければならなくなったから、ハワイに行けなくなった。」

「えっ？何それ！もう今の時期ってキャンセル料がかかるんだよ、それに5人分」

私達の都合でキャンセルするとなると両親の分のキャンセル料も当然こちらで払わなければならぬ。

しかしそれよりも何よりも旅行に行けなくなるというのが信じられなかった。

「会社の人で誰が変わって仕事に出てくれる人がいないか聞いてみてよ。キャンセル料を払う事を考えたら少しぐらい変わって下さった方にお礼してもいいから」

そうは言ってみだが世の中そんなに甘くはなくハワイの夢ははかなく消えて行った。

じゃらねっとな家の名前の秘密

じゃらねっと…ある旅行ブログに使っていて気に
いているのでいつの間にか

ペンネームのようになってしまった

ぱん…主人の事をゆりが小さい頃から何
故かぱんちゃんと呼んでい

て今は（ぱん）になってしまった

ゆり…愛称

第1章へ続く

じゃらねっとのシンガポール

第1章 1、悪夢 (後書き)

これからもっと面白くなります

2、よみがえる(前書き)

ハワイを泣く泣くキャンセルしたじゃらねっとな家。でも、あきらめず…

2、よみがえる

ハワイ行きはキャンセルとなってしまうが、そのぐらいで諦めるじゃらねっと一家ではなかった。

ピーク時、特に年末年始やお盆は出発日の40日前からキャンセル料がかかるが、とくにその時期は過ぎてしまっているのでキャンセル料を支払った。

3万円×5人分＝15万円

これはかなり痛い出費だったが、新たな旅行を申し込む際に帳尻を合わせようと考えた。

年末出発となる、とすでに12月に入っているので急いで申し込まなければならぬので、

早速一人で近くの旅行代理店に飛び込んだ。ハワイやグアムは込み合っているので行き先を変え、どこかアジアシティーに行こうということにぱんと決めた。

「シンガポールか香港でまだ空いているツアーはありますか？出来ればシンガポールの方がいいんですけど」

「大手のツアーは結構早く締め切りしてしまいますので、中小の旅行会社のツアーを探したほうがいいかもしれません。パンフレットで問い合わせしましょう」

そして、一枚びらパンのフレットを持って来てくれ

「これだったら大丈夫かもしれません」

「あー、そうですね、じゃあ12月30日か、31日の出発で空席を調べて下さい」

一生懸命調べてくれたが、両日とも満席だった。

幸いぱんの休みは5日までなので

「元旦発も調べてみてくださいください」暫くして

「その日なら空席があります。」

「そうですかー、じゃ、1日の出発にします」

ホテルは幾つか選択出来るようになっていてその中にはシンガポールに行ったら是非宿泊したいと思っていたシャングリ・ラホテルが含まれていたもので、迷わずそのホテルに決めた。

飛行機も希望のシンガポール航空が予約出来た。

「有難うございます。お陰様で海外旅行に行けます」感謝、感激！
そして申し込み金を再度支払った。

申込金 3万円×3人＝9万円

旅行代 14万6千円×3人＝43万8千円（諸費用別）

キャンセル料と合わせ 58万8千円

もしハワイに行っただとしてもそのぐらいはかかった（それ以上かも）と思うので、帳尻も合わせられラッキーだった。とにかく、また海外旅行に行けるのだ。

3、 カウントダウンは成田で（前書き）

やっと新たな海外旅行がシンガポールに決まったじゃらねっとなら、果たして本当に出発できるのか？

3、 カウントダウンは成田で

新たに旅行を申し込んでから旅行の準備をしたので慌ただしく、あつという間に年末を迎えた。

海外旅行の時はいつも成田まで車で行くので、有料駐車場に車を預けても良いのだが、成田のホテルに前後泊するのが私たちの恒例だ。三人で宿泊しても一泊1万円ちよつとなので、ゆっくりした方がよいかなど、つい宿泊をしてしまうのだ。

大晦日を迎え、家族3人、ぱんの運転で成田に向かって出発した。旅行はいつも、行き先がどこでも目的地につくまでが一番わくわくするような気がする。

昼前に自宅を出て途中で昼食、その後は関越高速、首都高、そして東関東道と乗り継いで一直線に目的地に向かった。

「今日は道路空いているね」とぱん。

「ほんとだよ。帰省する人たちはとくに実家とか戻っちゃったんだろうね」

「もうホテルに着く？早くホテルに行きたいな」

とゆりは楽しそう。時計を見ると三時前。

「もうそろそろ着くよ」

そう言っているうちに成田のホテル群が見えてきて、高速を降りた。

ホテルに着くとあまり混雑している感じはなかった。

これから海外旅行に行くという人々より、帰って来た旅行者の方が多そうだった。

しばらくすると大晦日と一緒にホテルで過ごす為、私の両親がやって来た。

このホテルはプールやサウナ、大浴場もあるので、夕食までゆっくりとサウナに入っただのんびり過ごした。

夕食はホテルのbuffetレストラン《ラ・フロリダ》を予約して

食べた。

レストランへ行くと満席状態だった。

このバッフェの目玉は焼きタラバとステーキのたべ放題なので、レストランに入るとプーンと焼きタラバの良い匂いが漂って来て食欲をそそられた。

焼きタラバだけでなく、ボイルした蟹もあった。

早速お料理のブースに取りに行き、蟹やステーキ、それ以外にも美味しい物を沢山盛り付けて、狸のお腹になるぐらいいたらふく食べ大満足した。

海外旅行前にこんなに食べて大丈夫？という位食べた。

8時過ぎに食べ終わったが、辺りを見回すとお客さんはかなり少なくなっていた。

この日は大晦日で紅白歌合戦をやっているから、皆それを見なければという日本人の習慣で

早々に引き上げたのだらう。

母も紅白が見たいというので、私達も早めに退散し部屋で紅白を見てゆっくり凄し、除夜の鐘でカウントダウン、ニュー・イヤーを迎えた。

そして厳かな日本のお正月と、ゆりの誕生日を迎えた。めでたし、めでたし。

本当は私達家族と両親とで、ハワイでカウントダウンの筈だったのだが、こうして皆揃って成田でカウントダウンを迎えるというのも滅多に無い事、これもまた良い思い出になる事だらう。

3、 カウントダウンは成田で（後書き）

海外でなく成田で過ごすお正月も良かったかもしれない。

じゃらねっとのシンガポール

4、 閑古鳥なく（前書き）

元旦の成田空港の様子はどつなのだろうか？心配するじゃらねっ
と達

4、 閑古鳥なく

いよいよ今日はシンガポールへ出発だ。

飛行機は午前9時25分の便なので、朝6時前に起きた。ゆりはいつも超寝起きが悪いので起こすのが一苦労だ。

支度をして朝食は食わずに、ホテルから空港行きの送迎バスに乗った。その時両親がバスの所まで見送りに着てくれ、

「気をつけて行ってらっしゃい、ゆりは一人で勝手にうろろしちや駄目よ。それからこれは少ないけどお饒別よ」

と母が渡してくれた。

「体調に気を付けて、楽しんで来なさいよ」

と父も心配そうだった。

「気を付けて行ってきます。おじいちゃん、おばあちゃん、お土産買って来るね」

と、ゆりが言う

「お土産は小さい物一つでいいよ」

そう言う両親は初めの予定では一緒にハワイに行く事になっていたのに、シンガポールは一緒に行かないから、一寸寂しそうだった。

バスの乗客は4、5組とあまり多くなかった。15分弱で成田空港に着き、シンガポール航空は第1ターミナル発着なのでそこで降りた。

中に入ると人影がまばらで閑古鳥が鳴いていた。《ガガーン、もうみんな海外に出国してしまったんだ》一気に出遅れ感が襲ってきた。

しかし、その【閑古鳥】のお陰で出国手続きは全く待つ事無く、30分ぐらいで全ての手続きが終わってしまった。朝食をまだ食べていなかったので軽く何か食べようという事になりカフェに入り、私とばんはコーヒーとパンを、ゆりはパンとスープを注文して、出発までゆっくりした。至福の一時だった。

以前年末に旅行した時、出国手続きがとても混んでいて、搭乗間際まで掛かり焦ったことがあったが嘘みただった。いつもこころ余裕だといいなあ。

9時前には搭乗カウンターに行くのと搭乗が開始するところだった。いよいよシンガポールへ出発だ。わくわくしてきた。

「ママ、もう飛行機乗ろうよ」

「そうね、ぱんが戻ってきたら入ろうね、どこへ行ったのかしら？」

ぱんは、もう時間だ時間だといつも焦るわりに、肝心な時は居なくなりみんなをハラハラさせるのだ。でも多分トイレだろう。

すぐぱんが戻って来たので、本当に飛行機に搭乗する事が出来た。これで一安心。

5、 憧れのシンガポール航空

シンガポール航空の機内に入るとキャビンアテンダントの素敵なロングの制服が目を惹いた。バティックという口ウケツ染めの生地で作られていて、シンガポールやマレーシアのお土産としても有名な生地らしい。

サービスや食事が他と比べワンランク上だと聞いていた事もあるが、この衣装に憧れシンガポール航空を利用してみたいという気持ちもあつたので、実際に間近で見られ感激ひとしおだった。

自分たちの席に着き、辺りを見渡すとガラガラで随分空いていた。「やけに空いているね、私達早く搭乗しちゃったのかな？」とぼんに聞くと、

「昨日ぐらいまでに殆どの海外旅客は出国しちゃったんだよ」

「そうかー？！でもこんなに空いてたらきつと機内では楽なんじゃない？どこにでも移動出来そうだし」

離陸間際になってもその状況は変わらず、殆どの席は空席だった。「いっぱい席が空いてていいね」とゆりは喜んだ。結局この飛行機は【がらんどろ】のまま離陸した。燃油の無駄使いかも？知れないが私達は喜んだ。

この飛行機は各席に液晶モニターが付いていて、ゲームをやったりビデオを見る事が出来るという事をパンフレットを見て知っていたのでゆりはとても楽しみにしていた。

定番のドリンクサービスが終わったら早速、ゆりがゲームのモニターを触り始めた。

「なんかこの席ゲームが出来ないみたいなんだけど」とゆりが言うので試してみると、本当にゲームの画面が出て来ない。

この日は日本人の乗務員が乗っていないようだったので、怪しい英語で中国系らしいキャビンアテンダントの女性に尋ねると、やはり私達の席はゲームの出来ない席だったようで、別の席に移動させ

てくれた。それから、ゲームをやり続け少し疲れて来たところ
でランチサービスが始まった。

メニューは写真のような表紙の綺麗な小冊子になっていて、
まずそれに感激した。そして

このメニューを開くと、かの有名なシンガポールスリングが載っ
ていたので、私はそれを注文した。これは飲んでみると、色々なフ
ルーツの味にお酒が入っているような感じで、口当たりは悪くなか
ったが、想像していたほどではなかった気がする。

料理の方は、魚のソテーと和食のきじ焼き井からのチョイスで、
きじ焼き井の方は京都『菊乃井』というレストランの有名シェフの
特別料理と書いてあったので、主人と私は迷わずそちらに決め、ゆ
りはお魚のほうを注文した。

「ゆり美味しい？」と聞くと「美味しいよ」という返事が帰って来
た。

「こつちも美味しいわよ」とお互いにお裾分けしてシンガポール航
空？を味わった。

この飛行機には男性のマナージャーの様な人が数人乗務していた
が、その人たちは機内サービス等自分ではせず、女性のキャビンア
テンダントに偉そうに指示を出していたのが印象的だった。今まで
乗った事がある飛行機では見た事のないスタイルだったので一寸驚
いた。満腹の後は、寝ることもせずまたゲームに夢中になり着陸寸
前までゲームをやったので、疎の頃には、機内の乾燥と疲れで3人
共目が血走っていた。便利なのは恐ろしや。

と言ってもサービスや食事はとても満足で、憧れていた飛行機に
乗った甲斐は十分にあった。

そして次回もシンガポールに行く時は絶対にシンガポール航空を
利用するぞ！と秘かに心に決めていたのだった。

シンガポール・スリング

1915年にシンガポールのラッフルズホテルのロングバーで誕生したクラシックドリンク

で、今では世界的に有名なカクテル。ドライジン、ベネディクトインDOM、コアントロ

、チェリーブランデーに、ライムジュース、パイナップルジュース、少量のアンゴスチ

ユラビターズ、グレナデンを加えてシェイクした飲み物。

第2章へつづく

じゃらねっとのシンガポール

5、憧れのシンガポール航空（後書き）

快適な空の旅でシンガポール旅行ははじまりました。
次回からはシンガポールです。

第2章 1、ここはどこ？

やっとじゃらねつと一家がシンガポールに到着したのは大体定刻で、現地時間の午後3時半頃だった。日本からのフライトは約7時間なのでハワイ便の行きの飛行時間よりは少し長いが、時差は1時間なのであまり疲れは感じなかった。

チャンギ空港に降り立つと、パームツリーやブーゲンビリアなどの花々が植えられ、すぐに南国に来た事を感じ取る事が出来た。

しばらく歩いて行くと両替所が現れ、そのカウンターの中にはインド人の係員がいた。これはちよつとしたカルチャーショックだった。ばんが、「ここでシンガポールドルに両替しよう」と言い日本円でとりあえず6万円を両替しようといインド人の係員に渡した。

この日はシンガポールドルが1ドル約67円で、両替してもらったシンガポールドルは\$758だった。これは両替手数料も入れて計算した金額で、アメリカドルへの両替に比べたらかなり得したような儲けたような気分だった。恐らくアメリカ\$だったら同じ金額だけ両替しても1\$120円代での計算だと650ドル前後にしかならなかっただろう。土産を沢山買ってあげられそう。

そのお金を手に握り締め到着カウンターに行き、バゲージを受け取りそのまま入国審査に向かった。係官はそれ程怖い人ではなく、ファミリー旅行なので、質問も受けない上、子供には飴を渡してくれた。

そして現地係員の方が待っている玄関ロビーの方に向かった。扉を出るとずらりと名前を書いたプラカードを持った係員が立っていたが、私達の係りの方はすぐ見つける事が出来た。見るからに中国人、といても丸顔ではなくとても細かい顔で、昔の日本にいそなおじさんだった。

一緒のツアーで来たグループが実は私達以外にも3組いて、新婚

さんらしきカップル、家族連れ、おば様方二人連れだった。

送迎バスに乗り込むと早速係りのおじさんの説明が始まった。このおじさんは一応日本語が話せるが、妙に中国訛が強く説明を聞いても所々「ちんぷんかんぷん」な事が多かったので、勝手

な推測も加えて聞き取り、中国訛の日本語聞き取り能力が高まった。初めにバスはマリーナ地区のリッツカールトンに到着し家族連れの人達が下車し、おじさんが一緒に付いて行ってチエックインの手続きをしたようだった。

次はすぐ近くのフラトンホテルに向かい、おば様たちがここで下車した。

このホテルは以前中央郵便局として長期に渡り親しまれて来た建物を2001年にホテルとしてオープンしたものでとてもクラシカルな建物だ。この辺りはシティーホールや最高裁判所などのコロニアル建築が多く、自分がどこの国に来たのか、本当にアジアの国なのかと疑いたくなってしまっただった。少しホノルルのダウンタウンに感じが似ているような気がして、ハワイ好きの私はこの国がすぐに気に入ってしまった。

この後バスは、私達の宿泊するシャングリ・ラホテルのあるオーチャード方面に向かって出発した。途中、オーチャードロードがチラッと見えたが綺麗な通りで、クリスマスからのライトアップが日本と違いニューイヤーを迎えてからも続いているらしく、暗くなるのが楽しみだなあ、とわくわくしながら通り過ぎた。

シャングリ・ラはオーチャードロードを車で5分ぐらい小高い丘の方へ上がったところにあった。

敷地に入ると立派なタワーが見え、ホテルのエントランスに到着した。

第2章 1、ここはどこ？（後書き）

やっと憧れのシンガポールに到着し、一瞬でシンガポールが気に入ってしまった3人。シャングリ・ラホテルは？

2、 シャングリ・ラ・ホテル

ホテルのエントランスが見えて来たところで、

「変わった服のドアマンがいるよ、見てごらんよ」とぱんが言うのでそちらを見ると確かに、赤いた変わった民族衣装のような服を着て変てこな帽子を被ったドアマンが見え、到着したらそのドアマンがドアを開けてくれた。

ホテルに一步足を踏み入れたとたんロビーの広さと、豪華さに圧倒された。天井は高く、素晴らしいシャンデリアが飾られていて想像以上だった。

ロビーの中央には大きなクリスマスツリーがそびえ立ち、沢山の可愛いベアが飾られていたのにも感激してしまった。

「ちよつと、ゆり、このツリーすごい可愛いじゃない、ここで写真撮っちゃおうよ」

「ここに立って、はい、ポーズ！」

有無を言わず、写真を何枚か撮った。

ぱんは、現地係員のおじさんとフロントにチェックインの手続きに行っていたのでその間、あちこち写真を撮って待っていた。

少ししたらおじさんは帰ってしまって、その後暫くしても手続きが終わらないので、ぱんの所に行って

「なにしてんの？まだ時間かかるの？」と聞くと、

「今日あたりは混んでてさっきまで殆ど満室だったみたいなんだけど、お昼ごろチェックアウトした部屋があって、その部屋は通常のツアーでは利用しないガーデンウイंकなんだって。でもそこしか空いてないからそこに宿泊させてくれるって」

「えーっ、ほんと？ラッキーじゃん！ガーデンウイंकってタワーウイंकよりもランクが上のお部屋だよ。私はガーデンウイंकに泊まってみたかったんだよね、嬉しいーっ」

超感激したじゃらねっとならった。

「さつきチエツクアウトしたばかりだからちよつと待たなくちゃいけないんだって」

でも少しくらい待ってもガーデンウイングに宿泊できるなら儲けもの。部屋は広いし、リゾートテイストなので南国気分が満喫出来そうだし。

40分ぐらい待っただろうか、ホテルの方が呼びに来てくれて部屋に案内された。

ガーデンウイングに行くエレベーターはタワーウイングには無く、フロントから玄関を正面に見て向かって右手に進み、ハイティール有名なローズベランダの横を通り過ぎ、タワーウイングから外に出てすぐの所にあつた。

案内されたのは3階で、エレベーターを出たら外だつた。熱帯植物に囲まれた回廊を通つて部屋に向かつた。なんだか、ハワイのロイヤルハワイアンショッピングセンターの中にもいるような感じで、不思議な気分だつた。

部屋に入ると中がとても広く、インテリアは全体的に南国リゾートのようで、一目で気に入ってしまった。広さは50平方メートルぐらいらしい。

「このベッドすごく大きくて寝心地が良さそうだよ」とゆりが言つた。

ベッドはキングサイズが一つだつたが、寝るまでにはエキストラベッドを搬入してくれるとの事だつた。

ガーデンウイングは各部屋にバルコニーが付いているので、バルコニーに出て見ると沢山のパームツリーの中に流線型の素敵なプールが

見え、欧米人らしき子供が数人遊んでいるのが見えた。近くのバルコニーでは白人のおじさんが寝そべって、読書をしていた。これぞ、バカンス

といったような光景が目の前に広がっていて、とにかく感動してしまつた。

部屋からは外の回廊を通り、プールまで直接行くことができるらしい。

それから、バスルームに入って見ると、中はかなり広く大理石造りになっていて綺麗だった。シャワーブースが別になっていて使いやすそうだった。

ちよつと不思議なものがバスルームの便座の横にあった。

「これって何、赤ちゃんでもお風呂に入れる時に使うのかな？」

「子供用のおしり洗いじゃない」

勝手な想像を膨らませたが、その不明な物は大理石で出来ていて、確かに赤ちゃんをお風呂に入れるのに丁度よいぐらいの大きさだった。

そして、3人で一生懸命考えたが、その時には何だか判明しなかった。

一休みして着替えたので、早速オーチャードの方に出かけることになった。

ホテルからはオーチャードロードまでのシャトルバスが運行しているの、乗り場まで行くとすぐにバスがあり乗せてもらった。

つづく

じゃらねっとのシンガポール

2、 シャンゲリ・ラ・ホテル（後書き）

次回はライトアップされたシンガポールの街が登場します。

3、 ライトアップに夢心地（前書き）

レベルの高いレストランが多いと言われていたシンガポール、初シンガポールでは3人はどんな素敵なレストランを発見するでしょう？

3、 ライトアップに夢心地

私達の乗ったシャトルバスは、トレーダーズホテルというシャングリ・ラの姉妹ホテルに寄った。外から見ただけだったが、かなり大きなクリスマスツリーが見え立派そうなホテルだったので、次回来るがあればこのホテルもいいかなって気がした。

ここで宿泊客が乗って来たが、年配の白人の方ばかりで、日本やアジアの国の人は私達以外はいなかった。

シンガポールへの観光客は全体的に欧米人が多いのだろう。

「ゆり、今日は疲れているんじゃない？」

「全然疲れてないよ、ハワイみたいに時差がないから楽で気に入ったよ」

「そういえば、すごく元気そうだよね、ゆりも、ぱんも」

ハワイはお気に入りで何度も家族で旅行しているが、到着日はゆりとはんは、いつも全く死んだようになって部屋に入るなり寝込んでしまって、起こしても中々起きず結局夜になってしまい、1日目が終わわりというパターンがほとんどだった。

でもシンガポールなら1日目から有効に使える感じで、4泊5日でもそれなりにゆっくりできそうだ。それでお気に入り度がアップした。

この辺りはもうオーチャードロードが近いのでイルミネーションが見え始め、少し行くと伊勢丹オーチャードにバスが停車したのでそこで私達は下車した。

そこからオーチャード通りを見渡すと、太い通りの両側に華やかなデコレーションがされていて、無数の幻想的な明かりや美しい光のアーチで飾られて街全体がお祭りのようだった。

クリスマス時期には各ショッピングセンターやホテルが「ベスト・デコレーション・ビルディング賞」というのを競ってクリスマスムード溢れるデコレーションを行うらしいので、その時はもっ

と華やかだったのかも知れない。

その光の海をじゃらねっとならぬ3人は、それぞれ携帯カメラやビデオを片手に、（特に私はビデオ係だったが）素敵なイルミネーションを撮って回った。

アジア地域では香港と同じぐらいに華やかなクリスマスと称されていて、街全体がライトアップされている様子は素晴らしく、この時期に世界中から観光客が訪れるという事が納得出来たし、一晩中も見えていたかった。

通りがかる人達は、中国系は勿論だがその他、マレーシア人、インド人やアラブ人が多く、欧米人もかなり目立っていた。やはりこの国は、国際都市なのだなと実感した。

カルチャーショックを感じたのは、様々な人種が混ざり合っていることよりも、アジアの国であるにもかかわらず、ほとんどの国民が英語を話し、コミュニケーションをしていることだった。日本にいて日本語しか話さない私達日本人にとっては（そう感じるのは私だけかも知れませんが）、一寸理解し難い光景だった。

日本に帰った時は、もう少しちゃんと英語の勉強をしようと秘かに思っていた。

しばらくロマンチックな気分でライトアップを眺めていたら、外が真っ暗になって来たので、時計を見たら現地時間の午後7時半頃だった。

シンガポールは赤道直下にあり日出、日没の時刻や気温が通年を通して殆ど変化がないという事なので、日中が長く、仕事が終わった後からでも、趣味や遊びに有効に時間を使えそうで、とてもこの国の国民が羨ましくなってしまうた。

もっと見ていたいけれど、とにかく私達3人はお腹が空いてきたので、食事をしようという事になった。

じゃらねっとのシンガポール

＜JJJ＞

＜JJJ＞

4、HAPPY・BIRTHDAY

ロマンティックな気分になりオーチャードロードを眺めていたらいつの間にか真つ暗になってしまったので、時計を見ると午後7時半頃だった。

シンガポールは通年、日の出や日没の時間がほとんど変化しないというから現地の人たちは毎日仕事が終わってからでもプライベートな時間がたっぷりとあり、ゆっくりと過ごすのだろう。なんとも羨ましい限りだ。 シャングリ・ラホテルの【なだ万】をちらつと覗いた時夕方の回店が6時30と表示してあったのだが、日本のホテルのレストランだと大抵のお店の開店時間は5時30分ぐらいだから日本より1時間ばかり遅い。不思議に思ったが、それは日没時間に関係があるのかもしれない。

3人ともかなりおながが空いてきたのでそろそろ食事にしようと言うことになった。

初めてのシンガポールの夜と、昨夜成田で誕生日を迎えたゆりの誕生日祝いを兼ねてどこかホテルで食事を、とピックアップアップしておいたヒルトンホテルのメインダイニングを見に向かった。

お店の前でメニューを見ているとお店の方が出て来たのでバッフェをやっているか訪ねると、

「夜はやっていません」との返事だった。

海外、特に東南アジアだと変わった味の食べ物などもありバツフエが一番無難だし、一流ホテルのだと結構ハイレベルで失敗が少ないから良いと思ったのだ。

「今度はどこに行ってみる？マリオットホテルはどうか、変わった中国風の屋根がついているホテルだけ」と私。

「ここから近いの？」

「DFSの近くだよ、あと近くにはグラランド・ハイアットもあるよ」

「じゃあ、その辺にいつてみよう」と歩き始めた。オーチャードロードの反対側に渡り少し歩いて行くと、スコッツロードと交わる所に来た。この角にはオープンカフェがありその建物がマリOTTホテルだった。

このホテルに入ってみたくなり、ロビーに足を踏み入れるとパームツリーが飾られていて素敵だった。

レストランを覗くとバツフェ形式で料金がそんなには高くなかった。先程のカフェと繋がっているらしく雰囲気も良さそうで気に入ってしまった。

「ここで食べようよ」と私。みんなすぐに賛成してくれたので入店した。席に案内されて辺りを見回すと中国人らしき人たちが多かった。そして早速料理を取りにブースの方に向かった。

料理の種類はコンチネンタル、タイ、インド、中国と様々揃っていたが日本食はなかった。他にローストビーフやボイルしたエビや貝、サーモンの刺身のようなものも結構あり、日本の感覚に近かったので食べる物には困らず、3人ともかなり食い意地を發揮して食べ物を取って来た。

自分たちの席に戻り、

「ゆりの誕生日にシンガポールに来て本当に良かったね。お誕生日おめでとう。今日は沢山食べてね」

「ありがとう、美味しそう、それにシンガポールはいいところだね」と3人で乾杯して食べ始めた。

持って来た食べ物は大抵美味しかったが、時に変わった味の香辛野菜があり、それはちよつと遠慮申し上げた。

デザートも種類が豊富で、手作りケーキもあり美味しかったし、コーヒー、紅茶も付いていたのでかなりの満足度だった。

ゆりの誕生日ディナーを満喫した後はタクシーでシャングリ・ラホテルまで戻った。

順番に疲れた体を豪華なバスルームで癒やした3人は、再度誕生日の夜を買っておいた飲み物で乾杯し、シンガポール一日目の夜は

更けて行った。

「もう、疲れたから寝るよ」とキングサイズのベッドに飛び込んだゆりが、

「このベッド、超気持ちいいよ、天国に行きそう」

「えーっ、ほんと」と私もベッドに横たわってみると、ほんとだ。

今まで味わった事のないふんわり感。

「すごい、本当に気持ちいいね、さすがシャングリ・ラね」とただただ感動してしまった。

その夜、じゃらねっとな家はベッドに吸い込まれるように眠りについたのであった。

つづく

4、 H A P P Y ・ B I R T H D A Y (後書き)

シンガポールは初日から楽しく、好印象のスタートでした。
次回は市内観光です。

第3章 1、コーヒー・ガーデン

朝は6時半に目覚まし（日本から持って来た小型と携帯電話）をセットしておいたが、昨日の疲れがなかなか起きられず、やっと7時前頃にベッドから起き出した。

メインとは別の建物なので、クーラーを止めて寝たら少し蒸し暑かった。

朝の爽やかな空気を満喫しようとベランダに出てみると外はまだ薄暗かった。昨日の夜、シンガポールは日没が遅い事がわかったが日没だけでなく、日の出も遅いようだ。

ハワイだとこの季節は雨期で気温が低く、朝起きると涼しいくらいだが、シンガポールのほうが朝も気温、湿度共に高いのだろうと思った。今日は午前9時からツアーに付帯している市内観光に参加する予定なので、急いで支度をしてレストランで朝食を取らなければいけない。

自分の支度にも時間がかかるのに、寝起きの悪いゆりをたたき起こさなければいけないので一苦労だった。毎朝の事だがベッドにしがみつくゆりを引き離し、たたき起こすのは戦いのようだ。

何とか支度して、8時頃ホテルのレストランに向かった。

エレベーターでガーデンウイングの1階まで降り、タワーウイングのロビーを下の階のプールに向かって下るとレストランはあった。名前は『コーヒーガーデン』といい室内と屋外のプールサイドに面した席に分かれていて、リゾート感たっぷりのレストランだった。係りが来たので、室内の席に案内して貰った。時間に余裕があれば外の席で食事をしたいところだったのだが、この日は生憎時間がなかった。その席に落ち着いた。

それにしてもこのレストランの案内係りの女性が無愛想なのは驚いた。

それはさておき、時間がないのでバッフェの食べ物を取ろうと一

周回してみると、食べ物の種類が多くびっくりしてしまった。

何かのガイドブックにこのレストランの夜のbuffetは、シンガポール1食べ物の種類が多く、一度では全種類は食べきれないと書いてあったのだが、朝食を見ると、なるほどと納得するぐらい並んでいた。

和洋中の他タイ、インドなどの料理がずらつと並びどれも美味しそうだったが、特に私達には和食が嬉しかった。何種類も並んでいたが、納豆、お浸し、他にも小鉢、巻物などをお皿に盛った。

他にも美味しそうなフルーツやペストリーが沢山あり、とても全種類を制覇するのは無理そうだったので残念だった。でも、まだ滞在中何度か食事するので色々な週類を食べるぞ！

料理を盛って席に帰ると美味しそうなオレンジジュースが、グラスに注がれていた。さすが、南国。

取って来た食べ物は何れも美味しく、特に和食はとても上品な味で、あまりに上品な味だったので、もしかしてこれらは『なだ万』で作った物では、と勝手な想像をしてしまった。

パンではクロワッサンに粉砂糖とアーモンドがついたものがこの上ない美味しさで、クロワッサン好きの私にはたまらなかった。

生まれて初めて食べるぐらいの美味しさだな、と感激。もしお腹に入るのなら三つ四つ、食べたいぐらいだった。

こんな美味しい朝食が宿泊料金に含まれていて、毎日食べられるのだからシンガポールは最高だ。これからはまりそう。

あまり時間がないので、ゆっくりと食べてはいられないから残念だったが、一通り味わえたので大満足だった。

海外旅行の醍醐味はなんといっても食事、それとホテルによって善し悪しが決まるといっても、過言ではないのでは、ないだろうか。

第3章 1、 コーヒー・ガーデン（後書き）

ホテルも食事も素晴らしく感激してしまった『じゃらねっと一家』
次話では、シンガポールの市内を観光した時の、わくわく、びっく
りの体験をお伝えします。

2、シンガポール植物園

9時にホテルのロビーに集合し市内観光へ行く事になっていたのに、ロビーに行ってみたらガイドさんはまだ来ていなかった。しかし2、3分待ったら中国系らしき女性の添乗員がエントランスから入って来て、私達の方へ向かって来たので私達の名前を告げて確認すると、「バス、外で待ってますから行きましょう」とバスに案内された。

バスはワゴンよりは大きな中型だった。

中に入ると他に4組ぐらいツアー客が乗っていて、どちらかというと年配者が多かった。何れもグループないしは家族連れのようなのだが、一組は祖父母と孫（中学生の男の子）のグループで、とても印象的だった。

添乗員の人は、体はとても細いのにエネルギー感を感じていかにも中国系といった感じで感心してしまった。昨日の係員よりは日本語が上手でシンガポールの生活や民族について色々話をしてくれた。シンガポールでは自動車の関税がものすごく高く、日本車など3倍ぐらいの価格になってしまう事や、政府が供給する住宅、といつてもマンション形式の建物だが、国民が皆が購入出来るように毎月の給料から強制的に購入資金として貯蓄させられるといった事を話してくれた。もっとも富裕層では豪邸に住んでいる人達もいるので、一般敵な庶民の住宅なのだろう。

そんな話を聞いているうちにすぐシンガポール植物園に到着した。熱帯植物に囲まれると生き帰る感じがして、わくわくする私。そう私は熱帯好きのじゃらねっと。

ガイドさんに集合時間と場所を教えられ、グループから離れて園内を見学し始めた。日本ではお目にかかることのないような南国の木や蘭科の植物がよく手入れされて、とても綺麗に植えられていたのが感激した。

まだ、少ししか園内を歩いていないのに、すぐに、ゆりのいつもの「疲れた」が始まった。（えーっ、嘘でしょ、まだほとんど見ていないのに）

暑さに弱いゆりは、すぐに音を上げるから困りものだ。まあ、汗はそれ程かかないといってもやはり南国、暑いのは確かなのだが、以前ハワイに何度も旅行をしていた時に、小学生になるまでベビーカーを現地で借りて乗ったというつわものなのだ。恐るべし、ゆり。

「後ちよつとで見終わるよ」と何とか旨いことを言って歩かせ、園内を一周する事が出来た。途中、蘭の花々の前で記念撮影するスペースがあり、そこはとても素敵だった。

やっと出口付近の売店にたどり着き、中に入ると外の暑さが嘘のような涼しさに生き返った。

ゆりはマールライオンの入ったピラミッド型の置物が気に入りをお土産に買った。その中には水のような液体と光る砂が入っていて神秘的だった。それにしてもマールライオンはかわいいな。

時間まで売店で涼んで外に出ると、先に出ていた（ぱん）とガイドさんが何やら話している。近くに行ってみると、私達は、今日の夜と明日からのツアーの予定がないので、盛んに勧められていた。

私にも「ナイトサファリはとっても楽しいよ、うちはJTBの系列だから同じツアーで『アニマルナイト』といって、トラムに乗って動物を見るだけでなく、専用のスペースで動物を近くから見ることが出来るよ、とてもいいよ。後でまた聞くから考えておいて」と中国訛りの混じった日本語で一生懸命勧誘していた。やはり中国系の民族だけあり商売には余念がないようだ。

その後一行は再びバスに乗り、次なる目的地で「まーちやま」にご対面する為に出発した。

じゃらねっとのシンガポール

＜UJ＞

2、シンガポール植物園（後書き）

熱帯に来たらやはり熱帯植物、これを見るのはお約束。かなり広くて素敵な植物園でした。日本では見る事の出来ない植物におめにかかれるのも海外旅行なればこそですね。

3、「まーちやま」1対面

シンガポールは初めての旅行だったので、久々にツアーを利用して、市内観光をした。といってもツアーに無料で付いていたのだ。行きたくもない土産物店に連れこまれるのが嫌で、あまり自分から申し込んでまでは利用したことはなかったけれど、暑い中を歩かなくてもすんで楽チンだったし、このガイドさんは面白い方なので参加して良かったかなと思った。

バスが走り出し、「つぎはまーちやま見るよ。まーちやま知ってるでしょ、そう、皆さんの知っているマールライオンよ。とてもかわいいよ。マリーナエリアのほうにあって、ここから近いよ。まーちやまは大きいのと小さいのと2つあって、他にもシンガポールにあるよ。どこだと思いますか」

誰も解らないのか返事をしなかったら「まーちやまは、セントーサ島にあるよ、あんまり大きくないけどマールライオン像とマールライオンタワーもあるよ。あとは『マント・フェーバー』というところにもあるよ。セントーサ島聞いた事ある？ない？セントーサ島に行かれる方がきつと思うけど、行ったら是非見てね。夜になるとレーザーショーがあつてマールライオンタワーの「まーちやま」の目から光線が出てとても綺麗よ、それからアンダーシーワールドも楽しいよ、お勧めよ」とどこか心地よい中国訛りで一生懸命説明してくれた。

15分ばかりで可愛い「まーちやま」のいる「マールライオンパーク」に到着した。

「まーちやま」はパークの中ほどに確かに2体あった。大きな「まーちやま」の背後に小さな「まーちやま」がかわいらしく。「まーちやま、可愛い！」思わず口に出してしまった。ゆりも「とっても可愛いね」と大感激。

想像していたよりは大きくなかったけれど、白くて綺麗で、口か

ら水を吹いているその姿は神秘的で、幻想的でもあった。頭はライオン、体は魚、紀元7世紀にマレーの王子が海中の獅子を追って来たという伝説が、この像の由来になっているらしいが、マラッカ海峡に囲まれた土地柄、このようなドラマチックな伝説が生まれたのかも知れない。

周りは海に囲まれ、マリナーエリアのホテル群や、シエントンウエイの高層ビルが見え、その近代的な背景が妙に「まーちゃま」にマッチして素敵だった。

とにかくとっても可愛くて気に入ってしまったので、記念に写真を撮り山撮った。日本に帰ってもいつも側にいられるように。

少しでも長く「まーちゃま」と一緒にいたい気分（出来れば連れて帰りたい）だったが、ガイドさんの「そろそろ次に行きます」の言葉で、「まーちゃま」とお別れしなければならなかった。涙、涙。やっと叶った「まーちゃま」とのご対面、短い時間だったが、感激一杯の一時だった。

「また必ず会いに来るよ、まーちゃま」

つづく

3、 「まーちやま」対面（後書き）

実際の「まーちやま」は想像以上に可愛く、これを見られただけでもシンガポールに来た甲斐がありました。

シンガポールは絵になる場所が沢山ありそうなので、楽しみにして
いて下さい。

4、「宝石城」の恐怖

再びバスに乗り込んだ後は、ガイドさんの案内に加え、車内お土産販売が始まった。車内での物売りは初体験、少しびっくりした。

「まーちゃま」を形どったキーホルダーの、少しずつ違うのがビニールケースに5連になっていて、これはハサミでカットすると、切り分けられるので「ばらまき土産」に最適だった。それから「まーちゃま」の形をした金属の入れ物に入ったフォークセット、これは蓋を開けるとその中に、柄の所に「まーちゃま」の飾りが付いたフォークが7、8本入っていた。蓋を閉めて、後ろにあるスイッチを入れると「まーちゃま」の目が赤く点滅し、エキゾチックな音楽が流れるようになっていて、私は一目で気に入ってしまった。

キーホルダーは10シンガポールドル、フォークセットは15シンガポールドル、「こっちは他で買えばもつと高いよ」とのガイドさんの言葉に惹かれる。どちらもそんなに高くはなかったしとにかく可愛かったので、「これ買おうか？」とゆりと「ぱん」に聞く。「可愛いから買おうよ」と言うので、私たちは2つ共買ってしまったが、「まーちゃま」ファンでなくても買ってしまったしもうな土産だった。

他のツアー客も皆、購入しようだった。

車内販売が一段落したところで、次の目的地である「宝石城」に到着した。

ここは読んで字のごとく宝石のお店、といっても工場がここであり、職人が手作りし、直売しているので、比較的低価格で良質な宝石が購入出来るという説明を聞いた。

「じゃらねつと」は実は宝石好きなので（買わなくても見るだけでも楽しい）、どんな宝石があるか、この「宝石城」に若干興味をそられていた。

また、シンガポールは輸入品などの洒落たデザインの宝石のある

国だという事もあり、是非見てみたかった。

海外旅行の楽しみの一つに、その土地々の名産品を購入するという事があるが、「じゃらねっど一家」もこれが楽しみだ。「じゃらねっど」は旅行した国々で、記念に貴金属を買うのが恒例でとても楽しみなのだ。購入した一つ一つに「じゃらねっど一家」の旅行の歴史が詰まっているみたいで、後になってそれを見ると、旅行の時の思い出が蘇って来るのだ。

店の入り口を入ると中から店員さんが出て来て、宝石店の説明を受けて、もし見終わっても勝手に外に出ないで集合場所で待っているように念を押されたが、なぜそのような事を言うのかその時は理解出来なかった。

そして、解散し各自好きなように見始めた。

私も宝石に興味があると言ってもここでは、見物だけのつもりだった。と言うのは、今度の旅行では以前から欲しかった、「ブルガリ」のネックレスを別のお店で購入しようと思っていたからだ。

「ぱん」もゆりも疲れていて椅子に腰掛けていたので店内をぐるぐると一周回ってみた。

一つ好みのデザインの素敵なネックレスを見つけ、試しに値段だけ聞いてみようと思いい、店員さんに「これはいくらぐらいですか」と尋ねると、日本円で11万円弱との返事だった。想像したぐらいに高かったし、買うわけではないのでそのまま去って行こうとしたら店員さんが、私の着けているネックレスを見て、「素敵なネックレスですね、日本で買ったのですか？」と聞いて来たので「これは日本ではなく、韓国に旅行した時購入しました」と言うと、「いくらぐらいで買いましたか、10万円以上はしたでしょう」とまた聞かれたので、「これはバーゲンをやっていた時に買ったのでそんなに高くありません」と本当の事を言った。

日本で買えば10万円ぐらいはするかも知れないが、韓国は意外と貴金属は高くないし、ロットデパートがバーゲンをしていた時に購入したので本当に高くはなかったのだ。

そこで店員さんが突然豹変し、日本から来た「カモ」を逃すまいと思っただのか攻め寄って来た。

そして、私が値段を聞いたネックレスを指差し「これは、少し値引きできますけど如何ですか」と勧められたので「ちよつと高いし、今日は買うつもりはないから」と言っただけで去ろうとしたのだが逃すまいと、今度は「5万円までは安く出来るから如何ですか?」と詰め寄って来た。

それでも断っていたら、更に今度は「このネックレスをいくらだったら買いますか?」とこちらが買うとは、一言も言っていないのに、買う前提で交渉を仕掛けて来たからすごい。本当に買うつもりがないのに値切っても仕方ないので「買うつもりがありませんから」と言っただけで行こうとしたが、追い討ちをかけて「今店長に幾らまで値引き出来るか聞いて来ますから」と奥の事務所の方に言ってしまった。

多少言葉的に疎通が悪い事もあるかも知れないが、価格的にこちらが納得がいかないから、渋っていると勘違いしていて、価格さえ折り合えば購入すると思っただけで、中国人の商売熱心さには感心させられた、と同時に閉口した。

普通の店だとこれで外に出してしまうところだが、入店する時に買いたい物が終わっても、勝手に店の外に出ないように念を押されていたので、外に出る訳にもいかなかった。

このシステムは高価な宝石がある事の他に、言葉は悪いがカモを逃がさない為もあるのではないかと思ってしまった。

私達の一連のやり取りを見ていたガイドさんが私の所に来て心配して、「無理に購入しなくてもいいですから」と言ってくれた。やはり店員さんが無理強いしているように見えたのだろう。こういう事はよくあるのかも知れない。

しかし、旅行代理店では、大抵、こういうお土産店からマージンを受け取っているというから、そういうことをあまり大っぴらに、お客さんに言っただけはいけないのかも知れない。

(ぱん) もどうしたのかと思って、私の所に来たので事情を説明した。

そうこうしている内に、またさっきの中国人の店員さんが戻って来て、私の所にやって来た。

「今店長に聞いて来たのですが、日本円で3万5千円まで割引してもいいと言われました」当然買いますよね、という感じだったのですが、私も思い切って「今日は本当に買うつもりがないから、ごめんなさい。でも、あちらにある、金に龍の姿が彫ってある、ペンダントヘッド、あれは母のお土産にいいなと思っていたので、頂きます」そういうと店員さんの機嫌を損ねるか冷や冷やしたが、そこは商売上手な中国人、にこにことして「中国では龍は縁起の良い、強運の象徴で中国では良い物とされています」と親切に教えてくれました。

商品を包んでくれ、支払うとき日本から持って来た、ハワイ旅行の残りの米ドル札があったのを思い出し、「米ドルで支払えますか？」と尋ねると「大丈夫です」とやけににこにこ返事をしてくれました。

そのペンダントヘッドは、57シンガポールドルなので、100米ドル紙幣を一枚渡して代金を支払った。商品と一緒におつりとレシートも渡されたのだと思うが、その時は、店員さんとのバトルの疲れと、やっと「宝石城」から逃れられる喜びで、ろくに確認もせずお釣りを財布に締まってしまった。

そして、再度バスに乗り、落ち着きを取り戻した時に、海外に来たら買う気がないのに商品の値段を尋ねたり、手に取ったりすると買う気があるとみなされるから、地注意しなければいけないなと思った。これはとても良い経験になった。

それから、米ドルのお釣りを確認したら少し少ない気がしたので、支払った時の事を思い出してみたら、シンガポールドルの値段を、米ドルに換算した金額を聞かずに払ってしまったので、もしかしたら、そのまま57米ドルで、多く支払ってしまったのかも知れない

と思ったが、後の祭りです。すっかりしなかつたが、よく確認せず支払ってしまった自分のミスだと反省してくよくよしない事にした。やはり海外に来て冷静さがなくなっていたのかも知れないが、この程度のミスなら後になれば笑い話だ。

とにかく「寶石城」は恐怖だったが、反面、面白かった。いつかまた訪れて店員さんとバトルをして購入してみたいものだ。

つづく

5、日本人買ってます

やっと「宝石城」から解放されたツアー客御一行様はバスの中で
やっと一息。

お昼が近いので、ゆりも「お腹がすいたよ」とそろそろうるさく
なってきた。次はやっとお待ちかねのランチかと思っていたら「皆
さん、もうお腹がすいているかもしれないが、あと一軒だけお土
産店あります。健康食品のお店よ。皆さん、あまり興味ない方もい
るかもしれないけど、もし気に入ったものあれば、買ってみて下さ
い。無理に買わなくていいよ。そのあとはお昼だから、もう一軒だ
け付き合っして下さい」

（あーあ、また寄るの！？やっぱりツアーだと、興味の無いお店
にも寄らなければならぬから嫌だな）でも、行程に含まれている
のだから仕方がない。

名前は忘れてしまったのだが、15分ぐらいでその健康食品の
お店に到着した、じゃらねっと達。

そろそろ中に入ると全員、椅子に腰掛けさせられ、なにが始ま
るのかなと思っていたら、これまた中国人らしき人が現れ、日本で
も一時期ブームになった「プロポリス」や何種類かのサプリメント
らしき物をテーブルの上に出して、その説明を始めたのだった。

私たち家族は全く興味を示さなかったが、他のツアー客は対照的
で興味津々といった感じで説明に聞き入っていた。

全ての商品の説明が終わると、お買い上げタイム。店員さんの説
明に乗せられ？、皆プロポリスやらローヤルゼリーやら、何種類か
の商品を手に取り次々購入している。中には沢山買っている人もい
た。とにかく飛ぶように売れていた。本当に欲しくて買っている
のだろうか。疑問に感じてしまった。

何か、買わなければ返れないというような雰囲気も確かにあった
が、日本人は全員右向け右というか、人が買ったら自分も買わなけ

ればという変な協調性？を持ち合わせているのか、はたまた国民性なのか、やたら商品が売れたのにはかなり驚いてしまった。

店員さんに勧められると断らない、気の良いところが海外では大歓迎されているのだから、悪くないかもしれない。

それに比べて、全然興味を示さず、何も購入しなかった私達は本当に日本人なのだろうか？　ちなみに「ぱん」は海外に行った時、

グアムでも、ハワイでも「あなた中国人？」と聞かれたのだが…だから、中国系民族の多いここシンガポールでは、シンガポリアンと誰も疑わないくらいしつくりとはまってしまった。

私達は全然買う気がないので、それを見ていたガイドさんが「バスに戻っていてもいいですよ」と親切に言ってくれたので、そそくさと戻ってしまった。一番のりだ。

少しすると沢山のお土産を手にとってみんなバスに戻って来た。

ツアーで回るのには足は楽だけど、あまり行きたくない土産物店に立ち寄りなければならぬので、時間的ロスが大きく半日がせいぜいだな、と改めて実感した「じゃらねっ」とだった。

あーっ、でもこれでやっとお腹を空かせたゆりがランチにいけるのだ。

つづく

6、シンガポールは「飲茶」です（前書き）

前回のショッピングでは散々振り回され、うんざりしていたじゃらねっとな家でしたが、やっとランチにありつく事ができました。どんなランチが待っているかお楽しみに。

6、シンガポールは「飲茶」です

観光より長いショッピングの時間が終わり、これでやっと待ちに待ったランチの時間が来た、とじやらねっと一家は一安心した。

昼食場所は、健康食品屋からもそう遠くないシンガポール川沿いで、クラークキーの近くの中華料理店だった。欲を言えばシーフードか何か食べられる素敵なカフェのほうが良いのだが、それはまず、シンガポールではありえないだろう。

ガイドさんに案内された飲茶店はツアーでしばし利用されるらしく、日本の旅行会社のステッカーが貼り付けてあった。

欲を言えばシーフード好きなじやらねっととしては、シユリンプか帆立のグリルでも食べながら、お茶も飲めるシーフードレストランか、そのたぐいの方が好みだったが、まず、それはありえないだろう。ハワイやグアムならいざ知らず。

シンガポールのパック旅行にセットされている市内観光の昼食は、どのパンフレットを見ても大抵専門店か、ホテルで飲茶を食べるといのがお決まりのようだから、しつかり、わたしたちもそのパターンにはまったのだ。

最も、シンガポールは国民の約6割ぐらいが中国系民族のくにだから、中華料理店が利用されるのは当たり前かもしれない。郷に入っては郷に従えの諺どりの感じ。

ガイドさんの説明によると、「このお店はツアーでよく利用されますが、結構美味しいです。日本人のお客さんは皆さん美味しかったです、言うてくださいます」

たいていツアーに利用されるお店は、日本人が多いのだろうし、次第に日本人の口に合うような味に変化させたか、日本人の好むような味のお店を見つけて利用しているかどちらかだろう。

案内されて中に入ると想像していた以上にだっ広く、正に団体専用といった感じのお店だったが、肩が凝らなくてかえって良いか

もしれない。

「本当に美味しいのかな？」と少し不安に思いながら店内に入るといかにも中華料理らしく、回転する円卓がならんでいて、何組かのツアー客が食事をしていた。

私達のツアーは2手にわかれ、祖父母と孫、それから年配のおば様方との8人で私達はテーブルを囲んだ。

「飲み物は別料金なので、それぞれ注文して下さい。料金は注文する時に払って下さい」とガイドさんにいわれ、皆、スプライトやアイスティーを注文した。

ツアーは決まったコース料理らしく、予め注文がしてあったようで、殆ど待つ事なく初めの2品が運ばれて来た。

1皿目は海老蒸し餃子やほうれん草の入った飲茶でこれは見た目は殆ど日本の物と大差なかった。味はとても美味しく、ゆりも「これ、とつても美味しいね、もつと食べたいよ」と満足そうだったが、一人一人の数が決まっているので、お代わりはないのが残念だった。

その後は春巻き、肉まん卵スープと続き、最後の方で焼きそばが大皿に盛られて出来たが、結構お腹がいっぱいになっていたもので、この上まだ食べられるか心配だった。

焼きそばといえば日本でよく食べる「マルちゃん」の焼きそばのような麺を想像していたので、かなりポリウムがありそうだなと思っただけで心配していたら、意外や意外、日本で「焼きビーフン」と呼んでいる細麺だった。これなら何とか食べられそう。

口に入れると、これがかかり美味しく感激だった。

食べる前にはもうお腹がいっぱいであまり食べられないと言っていた、ゆりと「ぱん」がムシヤムシヤと食べていたのは驚いた。それはやはり、食いしん坊の2人組み。それに美味しかったのだらう。

デザートは杏仁豆腐とマンゴープリンで、杏仁豆腐はとても美味しかった。マンゴープリンはマンゴー自体が、あまり私達は好きで

はないので残してしまっただが、この飲茶ランチは全般的に美味しく、日本でよく食べる味と大差がなかった。花丸だ。

ガイドさんの言っていた事は嘘ではなかった。ツアーの人々もとても満足した様子だった。

食事の途中に、ツアーに同行した写真屋さんが記念写真を撮ってくれ、食事の終わる頃出来上がった写真を見せてくれた。

気に入ったのがあれば購入してくださいとの話で、写真を見てみるとまあ撮れていたし、記念になるので購入した。結構この手の記念写真は高いのだが、他の人達も全員購入したようで、その後ランチはお開きになった。意外と楽しい食事だったし、自分達だけでは入らないようなお店が体験出来るので、ツアーの参加もたまには悪くないかも知れない。

6、シンガポールは「飲茶」です（後書き）

初めての国に来たら色々と体験してみるとその国の文化や、習慣などが見えてきて面白いです。更に色々な体験をして行きます。

6、 ツアーの謎？

ランチでツアーのメンバー同士がやっと少し打ち解け、あと半日も行動を共にしたら更に親しくなるかなと思った頃、もう後は最終目的地のDFSを残すのみとなってしまった。

私達はDFSに着きショッピングしたら、夜のオプショナルツアーには参加しない事に決めていたので、バスでシャングリ・ラホテルまで送迎してもらい、一旦ホテルに戻ってから、その後どうするか考えようと思っていた。だからツアーの一行とはDFSでのショッピングが終わったらお別れなのだ。

他の人達は当初から夜のオプショナルツアーを申し込みしていたり、そうでない人達もシンガポール植物園の時からガイドさんの中国パワー溢れる熱心なお勧め？に圧倒され参加を決めたので、DFSの後は他のメンバーはナイトサファリに直行する事に決まっていた。

私達もガイドさんに「うちのナイトサファリとてもいいよ、夜行性動物近くで見られるし、楽しいよ。他の会社のツアーだと動物と写真撮れないけど、うちのツアーは出来るよ。ナイトセンターサモレーザーショー綺麗でお薦めよ。参加するか後でまた聞くから考えておいて下さい」とやはり植物園の時に、中国語風な日本語で熱心に口説かれたのだが、ツアーに参加するつもりは殆ど無かった。

ただ、中国のジャンク船でのダイナークルーズには参加してみたい気はしていたので「このジャンク船のクルーズはどうですか？」と尋ねたら「あれはつまらないよ」と教えてくれた。（えっ、そんな事言っているの、自分の会社のツアーなの？）正直に教えてくれたので、とにかく何でも売り上げればいいと思っっている訳ではないのだな、とガイドさんに対する信頼度が高まった。

私達はナイトサファリに興味が無い訳ではなく、むしろ逆で滞在中まず真っ先に出かけたいスポットの一つなのだが、一つには集団

行動だと時間の制約が大きいと事ごとがあり参加を渋ってしまうのだ。

その上ゆりは寝起きが超悪くて、早朝出発のツアーに連れ出す為には、朝っぱらからどなりちらして起こさなければならなくなり、機嫌が悪いと蹴飛ばされるしいつも懲り懲り。出発する前にこちらがどつと疲れきってしまうのだ。

今回のツアーは大手の旅行会社の関連なのか、或いはその子会社が主催していて、オプショナルツアーはその親会社の方に参加するのだが、全般的にオプショナルツアーの料金が高いのも理由の一つだ。

このツアーのナイトサファリは「アニマルナイト」という名称で、送迎と園内のレストランでのbuffetの夕食が付き、サファリで特別に夜行性動物と記念撮影が出来たり、日本語トラムで園内を回れる等の特典があるのだが、なんと日本円で一人約1万円。これは恐ろしく高い気がする。

海外旅行にまで出かけツアー代金が高い、なんて言うのは私達ぐらいかもしれない。何だかケチ丸出してみたいだが（実際のじゃらねつと一家は多少ケチだが）、入園料や交通費の総額が3人分でもせいぜい日本円で1万円ちょっとぐらいしかしないのではないだろうか。

個人でナイトサファリに行ったと仮定して、掛かる費用を計算してみると

交通費タクシー片道約S20Sドル×2

入園料	大人	約S16ドル
	子供	約S11ドル

トラム 大人 約\$5ドル
約\$2ドル

園内の（バフェ）

大人 約17ドル
子供 大人と同額か半額だったか（不明）

やはり、合計しても日本円で1万円かちょっとぐらいなのだから、ツアーを利用した場合の3分の1の費用で3人がナイトサファリに行けてしまうのだ。これだとかなり滞在費の節約になる。

高いかわりにツアーは送迎付きで、安心、安全、気楽という3拍子が揃っているのだからということはないかもしれない。

しかし、ツアーを利用しないで行くというのも海外旅行の達人みたいだし、ロコ気分も味わえるのだからそれはそれで悪くはない。

DFSに到着して、ガイドさんにツアーの事を聞かれたので、勇気が要ったが「私たちはツアーには参加しません」と告げ店内を闊歩し始めた。

つづく

6、 ツアーの謎？（後書き）

実際に計算したことはありませんでしたが、ツアーはやはり割高な
だという事が改めて解りました。

次回は数年前にマリーナエリアからオーチャード地区に移動したD
FSの様子をお知らせします。

7、電飾DFS

海外でDFSといえば免税店の代名詞的存在。

海外に行った事のある日本人なら、多分知らない人はいないので、はというぐらいピュラーな、日本人御用達の免税店だから、滞在中にこのDFSに一度や二度、いや人によっては毎日通った方もいるかも知れない。そして日本人の好きなDFSは、ここシンガポールにもやはり存在していた。

数年前までDFSはマリーナエリアにあっただが、オーチャードからかなり離れていたのも、客足が買った悪かったからなのか、或いは新店舗を構えるまでの臨時だったのかはわからないが、ごく最近オーチャードの方に移動して新店舗を構えたのでラッキーだった。

場所的にはオーチャードロードと交差するスコッツロードに入っ
てすぐのところだ。私達のツアーバスがDFSに近づいて来ると、
巨大な電光掲示板のような派手な建物が見えて来た。

それは近くまで行くと更にハッキリし、建物の前面が細かく区切
られたパネルのようになっていて、赤、青、紫といった原色が順番
に点滅しているのだ。まるで『アタック25』のパネルクイズ（ち
よっと古いかも）の画面でも見ているような感じだ。原色傾向は中
国的かも知れない。かなり度ハデな建物だったが、今まで見た事の
無いような斬新さを感じた。多分日本ではあまり見かけないよ
うなデザインだ。

ガイドさんに案内され、店内に入ると、外装のわりに中はそれ程派
手でなく、わりと普通だったのでほっとした。

自由時間は僅か一時間と短かったから、じっくりと品定めするの
は無理なので、売り場の把握だけしようと思ひ、店内を上から下ま
でぐるっと一周した。でも、ハワイのDFSのようにには広くはなか
ったのですぐに回れた。

ざつと見ただけでも、1階はぬいぐるみや、ばら撒き土産によさそうなペンや、キーホルダーがあり、中でも黒地に小さなマールライオンがプリントされたバッグや、バティックの生地のスカーフ等が目を引いた。

2階、3階はブランドバッグや、化粧品売り場で、ブランドブティックもそれなりに入っていた。今度の旅行では「ブルガリ」のネックレスを購入したいと思っていたので、「ブルガリ」もチェック、店内はそれほど広くはなく、品揃えはまあまあといったところ。ハワイDFSは品揃えは勿論だが、お客さんを逃がさず、くまなく商品を見せようとする魂胆からか、一つの階をぐるりと一周しないと下の階には降りられないような、やっかいな造りになっているのだ。だから、ちょっとお土産を買い忘れたからといっても、時間が無い時にはおいそれと気軽には入っていけないお店ではないのだ。

でも、シンガポールのDFSはそこまで広くないので大丈夫！

ちらつと見ただけだったが店内は至って中国色豊かな商品が多いようだ。やはり同じ南国とはいっても、ハワイやグアムのようなリゾートテストとは少し違うようだ。

一時間はあつという間に過ぎ、集合時間だったので1階の集合場所に行くとは大体みんな集まっていた。

そこでバスを待つ間、再びガイドさんが今日の夜のツアー「アニマル・ナイト」（これはナイトサファリだが）に参加するかどうかの最終回答を（ばん）に聞いて来た。あまり熱心に誘って下さるので、断りづらいのだが…

私は知らん顔でばんに任せておいたが、「子供が疲れているので、今日は参加しません」とガイドさんに屈せずと言えたのでよかった。えらいぞ、ばん。

それにしても、日本人的感觉からするとこのガイドさんは親切を通り越して、ただしつこいだけのように思いがちだが、少しでもお客さんの近くにいて、情熱的なまでの熱心さで勧誘してくるのも、お客さんに楽しんでもらおうとするサービス精神なのかもしれない。

と思った。

中国系の人々とは商売に対する考え方や、習慣が少し違うのだから。

でも、確実に私達を楽しませてくれようとしていた。

その後私達はバスで『シャングリ・ラホテル』まで送ってもらって同行者と別れた。短かったが楽しいツアーだった。

8、 『ブラックベツパー・クラブ』

ツアーから戻ってホテルの部屋に戻ったは3人は、どっと1日の疲れてしまった。

このホテルはオーチャードから若干離れているが、夜にはまた、街に食事に出かけようと思っていた。が、段々と面倒になってしまい、朝食を食べた『コーヒー・ガーデン』で食事をする事に変更し、6時半に予約を入れた。

疲れたので一休みしていたら、いつの間にかレストランの予約時間を少し過ぎてしまった。

身支度が整っていないので再度レストランに電話をして、予約時間を7時半に変更してもらった。

真冬の日本から急に常夏の国に来て気分はすっかり南国なのに、身体はどうも気候の変化に着いていけないようだ。

やっと重い腰を上げたのは7時半近くなってからだ。

少し遅れてレストランへ行くと、朝は時間が無くてよく見なかったが、お店の入り口には新年になっても、まだ可愛いクリスマスツリーが飾られていたので、再びクリスマス気分が蘇って来た。

日本とシンガポールとで2回クリスマス気分が味わえるなんて最高だ！やはり海外はいいな。

お店の入り口にはメニューが何もなく、バツフェとは解っていたのだが料理の内容や料金が全くわからない。把握しておかないと何だか不安。(ああ、予約の時に確認すれば良かった)

このレストランで食事する人達は、一々料金なんて気にしないのかも知れないが、私達は庶民なので十分気になった。

『ぱん』が勇気を出して店員さんに聞くと、この日は金曜で通常のバツフェにシーフードバーベキューが付いて\$67\$という事だ。

一瞬、ちょっと高いのかなと思ったが、米\$ではなく\$への換

算なので、これが意外と高くないようだ。

計算すると、日本円で一人約4700円、税込みでも5000円弱だからそれ程高くないのかも知れない。

とにかく、この高級ホテルのシャングリ・ラで食事が出るのだから料金なんて関係ない！と、店内になだれ込んだ。

質内の席に案内されると何故かこの時間でもガラガラ。日没が遅いから夕食も遅いのだろうか？

何はともあれお腹が空いたので、早速食べ物をチョイスし始めた。目指すはシーフードとばかり、ガーデンサイドにあるシーフードバーベキューのコーナーへ三人共飛んで行った。

バーベキューブースには私たちの好きなサーモン、ロブスターやチリ・クラブといった新鮮な魚介類がずらつと並んでいて、自分で好きな物をチョイスしお皿に乗せ、シェフに渡すとグリルしてくれるのだ。

私はまずサーモン、ロブスターをチョイスし、シェフにオーダーした。

焼き上がるの待つ間、室内の料理を取りに行った。

コーナーが分かれていて、日本食、コンチネンタル、タイ、インド、マレーシア、そして中国料理がずらつと並んでいて、パツと見ただけでも簡単に100種類ぐらひはありそうだった。

日本食は朝食より更に種類が多く、天婦羅や寿司まで並んでいた。日本食しか食べられない人でもこれなら困らないだろう。

私達は、変わった香辛料はちよつと苦手なので、日本食とコンチネンタルを中心にチョイスしたが、シンガポールやマレーシア名物のサテという焼き鳥はとても美味しかった。

日本の焼き鳥をもう少し甘くした照り焼きみたいな味に、ピーナツ味噌のようなものをつけて食べるのだ。これは、お代わりまでしてしまった。

暫くすると、先程のバーベキューが焼き上がったので取りに行った。

焼きたてのサーモン美味しそう！

ロブスターの横には、赤いソースが添えられていた。これがかの有名な『チリソース』かと妙に納得、感激！

《ぱん》がサーモンのお皿の他に、グリルして貰った物をもう一皿持ってきて来たので、「ちよつと欲張り過ぎじゃない！それに、その真つ黒い物は何？」

実は、その黒い物の正体、これがシンガポールで『チリ・クラブ』と共に有名な『ブラック・ペツパークラブ』だったのだ。

その黒いソースがブラックペツパーで、ペツパーの大きな実が沢山入っていた。

実は、私はブラックペツパーのソースが大好きなので、興味深々。早速かぶりついた《ぱん》は「これ、凄く美味しいよ、ブラックペツパーのかかった蟹だよ」

と言うので直ぐに味見をさせてもらうと、本当に美味しくて大感激。ロブスターに掛けても良さそうだ。

取ってくれば、と言われたけれど、蟹自体は甲羅が付いているので、食べるのにかなり格闘しなければならぬ様で大変そうだったので、（ぱん）が捌いたのを横取りして我慢した。

このホテルの同系列の『トレーダーズホテル』のレストラン『ア・ホイズ・キッチン』は『チリ・クラブ』や『ブラックペツパー・クラブ』の美味しい事で定評があるらしいので、時間が許せばそちらにでも食してみたいところだ。

ロブスターのグリルも美味しかったが、チリソースで食べるより、私はアメリカンスタイルの香味オイルにガーリックの入ったソースでグリルした方が好みな。

香辛料が苦手なので、食べられない種類の料理もあったが、好きな物だけ取ってもかなりの種類が食べられた。

それに、デザートにはパイナップルのような定番から見た事の無いようなフルーツ、ケーキ、タルト、シンガポール独特のお菓子、アイス数種類と食べきれないぐらい並んでいて全部はとも食べ切

れなかったが、かなりの種類を制覇した。

ラムレーズンのアイスと、タルトがとても気に入った。

そして、名物の蟹料理をを食べられたのが、何よりの収穫だった。

全般的に食事は素晴らしかった。また、食べてみたいな。

第4章 1、セントーサ島へ

あつという間に旅行も三日目の朝を迎えた。

昨日より少し遅くまで寝てしまい、午前8時頃起床してベランダに出てみると、朝の天気はうす曇り。

昨日もそうだったが、朝からあまりカラッと晴天という事はないのかもしれない。

赤道直下とは言いながら、雲で常に覆われているらしくハワイやグアムに比べたら案外

日中の日差しも強くないのかも知れない。

一旦は起き上がったものの、何だか頭が重くて軽い吐き気がする。どうしたのだろう？

昨日はビールをコップ一杯飲んだだけだから、まさか二日酔いでもないだろう、と思いながら起き上がろうとしてみるのだが、頭が重くて気分が悪かった。

やはり真冬の日本から真夏の気い候に変わり、その上湿度も結構高いので軽い熱中症に掛かってしまったのかも知れない。

再度寝てしまい、起き上がった時は午前9時半近かった。でもその頃には、はかかなり気分が良くなっていたので助かった。

昨日の『コーヒー・ガーデン』は幸いAM11時30分まで開いているというので、10時過ぎ頃朝食を取りにレストランへ向かった。

この時間になると、ゆつくりと朝食を楽しむ欧米、特にオーストラリアからの年配の旅行者が殆どで、もともと少ない日本人の姿は私達以外一組ぐらいしか見かけなかった。

昨日は時間が無く室内の席だったので、爽やかな南国の風に吹かれようと、熱帯植物園さながらのガーデンサイドの席に案内して貰った。

着席すると、不思議な事にこのレストランの周りだけそよそよと、

気持ちの良い風が吹き抜けて行くではないか。

その時は特に気にも留めず今日は風が吹いているのか、と思っただけだったが、後になって考えてみると、このホテルのレストランの周りだけいつも風が吹き抜けていたような気がした。

このホテルは少し高台に建っているのだが、その立地を上手く利用して、風が流れるように工夫して、設計されているのかも知れないと思った。

この日の朝食は、和食を少しと前日にとても気に入った粉砂糖の掛かったクロワッサンと体調の回復にフルーツをたっぶり、それとシリアルで割とあっさりした食事を取った。

のんびりと、気持ちの良いガーデンを眺めながらの朝食は格別に贅沢な気分浸れ、それだけでもご馳走だった。最高の贅沢だ。

朝食の後は、セントーサ島へ出かける予定だったので、通常なら電車やケーブルカーを利用してそこまでいくのだが、幸いこのホテルには、セントーサ島と同じシャングリ・ラ・チエーンのホテル、シャングリ・ラ・ラサ・セントーサがあり、そこまでシャトルバスを運行しているので、それを利用する事にした。

タイムテーブルを見ると、バスの運行は1時間に1本ぐらいで、お昼過ぎのバスを逃すと、また1時間ぐらい待たなければならぬ。時計を見たらもう11時半。ゆっくり食事をしすぎたかな。

これは急がないと間に合わない、と部屋に戻り慌てて支度をして、玄関前からバスに飛び乗った。

周りを見渡すと、昨日のシャトルバスと同じで私達以外は全員が欧米人らしき人々。ちょっと場違いな感じではあったが…

シンガポールって本当に欧米やオーストラリアからの旅行者が多いのだなど、改めてびっくりした。

10分も乗っていたらすぐ郊外へ出たが、相変わらず、綺麗で衛生的な国、というイメージに変わりは無かった。

ただ、一層自然が多くなり、緑も濃くなってローカル感が増したようだった。

ローカル感が増してくるものの、何処まで行っても衛生的で綺麗な感じは変わらなかった。セントーサへの入島ステーションまで来たところで、バスの運転手さんが何やら乗客に確認し始めた。皆、チケットのような物を見せていたが、私達は持っていなかった。

恐らく入島する時には、入島料を徴収されるのだが、その代わりにチケットだ。

ホテルで入島料を負担して乗客に前もって渡していたのだろうか、或いは、事前にホテルでシャトルバスを予約する時に、入島料を支払っていたのかもしれない。

とにかく、シャングリ・ラの宿泊客である事だけははっきりさせた方が良さそうと思って、客室のカードキーを運転手さんに提示したら、頷いてくれて、それでパスした。一安心だ。

私達はバスに乗る時に何も聞かれなかったし、慌てて乗り込んでしまったが、やはり事前に確認するべきだったと反省した。

『ラサ・セントーサ』で下車した後、折角来たのだから、とホテルのロビーに入ってみると、オープンエアの心地良いスペースが現れ、まさにリゾートホテルの感じだ。ホテルマンの制服も南国風。こんな感じのホテルに宿泊するのも悪くないなと思ったりした。

ロビーの直ぐ下はヤシの木に囲まれた南国調のプールが見え、更にその先には白砂のビーチと遠くを行き交う船やタンカーの姿が見えた。

なんとも異国情緒溢れる光景だった。

ハワイに旅行した時より海外に来た感じがしたから不思議だ。

初めに見物予定のアンダーウォーターワールドまでは、ホテルからそう遠くないので歩いて向かった。

2、 ピンクイルカは柔らかい？

アンダーウォーターワールドまでは島内の案内図を見るとすぐ近くだったので徒歩で向かったのだが、歩いて5分ぐらいですぐ到着した。

私達はアンダーウォーターワールドは初めて入館するのだが、このアンダーウォーターワールドは、シンガポールだけではなく最近は様々な国で見かけるようになった。

入り口の近くにはポップコーンスタンドがあつて、ゆりが食べたというので前まで行ってみたら塩味ではなくて、なんと、甘そうなハニーポップコーンを売っていた。いや、この暑いのに甘い味は？！この暑さで甘いものは勘弁だ。

この国の人々は暑い中甘い物を食べるなんてかなりの甘党なのか、とちよつとびっくりした。

アンダーウォーターワールドの窓口には、水族館とドルフィンラグーンでのイルカショーとのセット券があつたのでそれを購入した。

ピンクイルカは東南アジアでは、シンガポールと香港ぐらいで見える事が出来ない珍しいイルカなので絶対に見たいと思つていた。ゆりにも見せたいしね。

ピンクイルカのショーの後に、毎回10組だけピンクイルカとの記念撮影が出来、その券も購入しようと思つていたら、その券はそこではなくてイルカのショーの近くの売店で販売しているというので、それは後ほど購入する事にした。

中に入ると歩くエスカレーターがあり、それに乗りながらぐるりと周りを取り囲む巨大水槽の中の魚達を見物しながら一周した。

この水槽には普通のお魚達だけでなく、普通では、まず中々お目にかかる事が出来ない、サメやエイを見る事も出来た。

エイだけでも感動的なのに、サメが迫力のある姿で泳いでいて、迫ってくる感じは圧巻だった。ちよつと怖い感じだったが、暫くそ

ここで見とれてしまった。

館内は それ程広く無かったので、結構すぐに見終わってしまった。

出口付近には小さな子供達が、水の生き物と触れられるコーナーもあつたのだが、ゆりがそこは寄らなくていいと言つので通り過ぎ、外に出てしまった。

外に出て時間を確認したらイルカショーの時間が迫っていたので、急いで島内バスでショーを行うラグーンの方へ移動した。

ショーを見物する席は砂浜にありちよつと暑そうだったのだが、一応屋根付きだったので助かった。

開演まで若干の時間的余裕があつたので、「すぐ近くの売店で、何か買ってくる」と《ぱん》が言つて、売店に向かつて行つた。

何か美味しい物でも買ってくるのかと思つて待つていたら、暫くして《ぱん》が戻つて来た。

「何を買つて来たの？」と買つてきた物を見ると缶の緑茶とお菓子。暑いので緑茶のようなさっぱりした飲み物が飲みたいと思つていたので、早速缶を開けて、勢い良くゴクリと一口飲み込んだ。すると、「何これー？緑茶じゃないの？」とても緑茶とは思えない変な味。

でも、缶を見るとどう見ても緑茶だった。

「これって本当に緑茶なの？」とぱんに聞いたら「きつと、緑茶に砂糖を入れているんだよ、」「お砂糖の入つてないお茶はないの？」「無いんだよ！」

これにはびっくりしてしまった。どうしてお砂糖入りにしたのか不思議だった。

やっぱりシンガポールの人々はかなりの甘党のだと確信した一瞬だった。

ショーが始まるとイルカ達はとても可愛くて、見ていただけで幸せな気分になつた。

案内は英語だけだったので今一つ解りにくかったが、ショーを見

ていれば大体理解出来た。ショーは30分ぐらいで終わり、その後はピンクイルカとの記念撮影なので暫くはそこでしばらく待った。ピンクイルカとの撮影は1回のショーごとに10組までと決まっています、事前にチケットを購入していないと参加できないというので、すぐ近くの売店でチケットを購入しておいた。

10分ぐらい待った後撮影はビーチの波打ち際で係員の指示の元に順番に行われた。

ひざ下まで水に浸かるので、パンツ等は折り曲げて塗れないようにした。

ゆりと《ぱん》の番になるとゆりは恐る恐るイルカをなせて記念撮影をして貰った。

後からゆりに聞いたら、このピンクイルカは赤ちゃんで、お腹がとっても柔らかくて、触るとき持ち良かったと言っていた。(可愛いな！私も触ってみれば良かったな)と思った。

珍しいピンクイルカを見られたのでゆりは本当に大喜びだった。

3 怪しいリムジンタクシー

一番見たかったピンクイルカのショーを見終わってピンクイルカの赤ちゃんと記念撮影したら、午後4時半ぐら이었다だったので、急いで島内バスでマールライオンタワーへ向かった。

このタワーのマールライオンがシンガポールで一番大きい、と市内観光の時ガイドさんから聞いていたので興味津々で行ってみると、やはりかなり大きなタワーだった。

マールライオンの口の部分が展望台になっているので、エレベーターでそこまで登って外に出てみると、シンガポールの景色を360度見渡す事が出来るようになっていて、遠くのマラッカ海峡まで望めて最高の景色だった。ただ、この口の部分は飛ばされそうなくらいの強風が吹いていたのでゆっくりと眺めてはいられなかった。

マールライオンタワーでセントーサ島の観光は終わりにして、その後はナイトサファリへ行く事になっていたの、タワーを下りた後は再び島内バスに乗り、ケーブルカーステーションの方へ向かった。

ケーブルカーに乗ると始めはセントーサ島が見えていて、下に行くにつれて四方にエメラルドグリーンの海が広がって来て、マラッカ海峡をのんびりと眺められた。異国情緒溢れる景色には3人とも感動した。

ケーブルカーを降りた後は、ケーブルカーステーションからは地下鉄のウォーターフロント駅までは歩いて行き電車に乗るか、後はタクシーを利用しなければいけないのだが、なるべく安上がりに電車でオーチャードまで一旦戻りたいところだった。そこからならタクシーでナイトサファリまで行っても、そんなに高くないかなという思いがあつたのだ。だが、ケーブルカーを降りた時点で我が娘ゆりは、「いやだ〜！また歩くなんて」と既にタクシーモード。

でも、こちらでも少しでも安い方が助かるので、「駅まで歩いて行ったら、ジューズ買ってあげるからさあ」と一応期待しないで言っ

てみた。

だが、結局ゆりは聞く耳を持っていないので、やっぱりタクシーで行こうかと諦めかけていた時、どこから現れたのかわからないがタイミング良く、いかにも中国系らしきおじさんが近寄って来て、「オーチャードまで30ドル」と言った。

やけに高いのでは、と思って断つたら今度は「どこまで行くの？」と聞いて来たので「ナイト・サファリへ行きたい」と言ったら「ナイト・サファリ35ドルOK?」と再度交渉して来た。少し安くしないと、利用しないと思ったのだろう。

若干高いかなと思ったが、ナイトサファリはここからオーチャードまでの2倍ぐらいの距離があるし、3人ともかなり疲れていたの
でナイトサファリまででその料金ならいいかな?と乗せて行ってもらう事に決めた。

オーチャードからナイトサファリが20ドルぐらいらしいから若干高い気はしたけれど、海外旅行だし、その分はチップでも払ったと思えば良いかなと。

そして、おじさんに案内されてタクシーまで行くと、なんとそれは普通のタクシー新しそうなベンツのリムジンだった。しかも、とても新しそうな。

まさか、シンガポールでベンツに乗るとは思っていなかったの
でちよつとびっくりしたけれど嬉しかった。

案内されて車内に入ると外観だけでなく、車内もとても綺麗だった。私達が車に乗り込んだら、すぐおじさんは発車した。

シンガポールは大して治安が良い国なので、大して疑いもせず、このもぐりみたいなたクシーに乗ってしまったが、ヨーロッパあたりで得体の知れないタクシーになんか乗ったらすぐ麻酔薬でもかがされて、身ぐるみ剥がされて道端に放り出されてしまいうさな、とても危険な事かも知れない。シンガポールなや日本みたいに治安が良ければそんな心配はいらないので、つくづく有難いと思った。

タクシーに乗ってからは昼間の暑さと疲れですぐ眠ってしまいな

イトサフアリまで、多分車に乗る事40余りだったと思うが熟睡してしまつて、運転手さんに起こされて初めてナイトサフアリに到着した事がわかつた。

おじさんにお礼を言つて代金を払う時、「また帰りも、迎えに来ましようか？」と英語で聞かれたのだが、「出る時間がわからないから結構です」と断つてそこでさよならした。

降りたタクシースタンドの辺りには、オーチャードからナイトサフアリまではS\$15〜20と書いてあつたので、やはり、私達のタクシーの方が少し料金が高かつたみたいだ。

まあ、あんな立派なベンツに乗せてもらえたのだからそう高いとは言えないかも知れない、と納得。

無事、ナイトサフアリに到着して良かった。

4、 ナイト・サファリ

ナイトサファリには午後6時過ぎに到着した。

サファリの入園口の外には、良くツアーなどで利用されるバッフェ形式のレストランがあつたので、まだ入園するには早いし、中に入ってしまうと食事をする所が無いかも知れないと思ったので、先にそのレストランで食事を取る事にした。

中に入るとやけに日本人が多く、幾つかの日本の旅行代理店のツアー客が殆どで、日本人で固まって食事をしていた。

その代理店の中には今回私達の利用したツアーの親会社もあり、アニマルナ〇トなるツアーを行っていて、市内観光同様、オプショナルツアーも共通なので、昨日の市内観光の時にガイドさんに「うちのツアーだと特別に夜行性動物が近くで見られるし、シヨールは特別な指定席で見物出来るよ。とつても楽しいからお薦めよ。是非あなた達も参加してみて下さい」と熱心に薦めてくれたのだが結局、参加はしなかった。

ツアーの内容にも良かったし、移動も楽で安全なので、ちよつぴり惹かれたのだけれど、何しろツアー代が日本円で一人一万円、ガイドさんは「内のツアーは安いよ」、と言っていたが、三人となると三倍の三万円にもなるので、家族連れにはちよつと痛い金額だった。

結局、私達はツアーを利用しないで半分以下の料金でナイトサファリへ来られたのだから結果的にはかなりお得だったようだ。

このレストランはガイドブック等によると、あまり美味しくないように書いてあったので少々不安もあつたのだが、食事はbuffet形式で、サラダ、メイン、デザート、ソフトドリンクとまあまあ種類が揃っていて、料金が安いので結構満足した。

取り立てて美味しいとは言えないかもしれないが、まあ合格点かなと私達は思った。

オープンエアですぐ近くにサファリの動物が見えていて、サファリの気分になりながら食事をするのもまた格別だった。

午後7時一寸前ぐらいから、入園口に欧米人が沢山並び初めた。まだ、暗くならないのに変だな、やけに気が早いなあ？と不思議に思っていて、少ししたらどんどん入園し始めたので、園内トラムが動き始めたのかな、と思っていた。

でも私達は、ナイトサファリだから、かなり暗くなってからでないと夜行性動物を見られないと思って、レストランでひたすら食べて待っていて、やっと真つ暗になりかけた午後7時30分頃遅ればせながら入園した。

いざ入園して、トラムチケットを購入しようとして売り場に行くと既に、すぐに乗れる日本語トラムは既に満席で、英語トラムならすぐに乗車出来るとの事だった。

せつかく乗っても動物の説明があまり解からないとつまらないので、空席のある日本語トラムまで15分ぐらい待つ事にした。

元々、日本語トラム英語トラムに比べて本数が少ないようだった。

トラムは屋根がない4人掛け位の座席が、10列ぐらい連なっている乗り物だった。

最近個室みたいになっていてコース料理の食べられるトラムも登場しているみたいなので、カップルでの利用に良さそうだなあ。

私達の乗ったトラムは全員が乗ったらすぐに発車した。

シンガポールは夜になると、意外と気温が下がり、風も出て比較的涼しくなるのだけれど、トラムが動き出したら周りのジャングルから心地よい風がそよそよと吹いて来て、それがとて涼しく心地良くて、サファリの気分を盛り上げるのに充分だった。

シンガポールは湿度が高くて暑い国といわれているけれど、日本なんかより全然涼しくてな快適な国だな、と実感した。

後になってナイトサファリで良く思い出すのは、心地良かったジャングルの風の事だ。

サファリの中は幾つかのゾーンに分かれていて沢山の夜行性動物

を見た訳なのだが、動物のいる場所が暗いので実際にはどんな動物がいるのか良く解らなかつたし、あまり記憶にもないというのが本当のところだ。

唯一覚えているのはゾーンが幾つかに分かれていたことや、トラムカーの日本語案内で『ジャコウネコ』という動物がいると聞いた事だつたかな。まあ、そんなものでしょう。

後になってガイドブックを読んだら、ゾーンが八つあり、マール、インドサイ、ジャツカル、サーバルキャット、シマハイエナ、バビルサなんて珍しそうな動物もいれば、フラミンゴ、キリン、カバのような見慣れた動物もいたらしい。

一周する間の約40分間、ずっと動物を見るより心地良い風の事で一杯だつた。

トラムが終点に着いた後は歩いて、屋外にあるアニマルショーの会場へ向かつた。

結構広い会場で、座席は階段状なのでどの位置からでも大体、ステージを見渡す事は出来る様にセッティングされていたが、トラムに乗車した時間が遅かつたので、会場へ入りも後のほうになつてしまい、座席は一番後ろに近かつた。

ショーは結構色々な動物が出て来たので、言葉があまり解からなくてもたのしめた。

きちんとゴミを分別して捨てるカワウソが可愛かつたし、ピューマが大きな木をよじ登り、太い枝からジャンプする様はかつこ良かった。

また、美しい模様の毛皮に包まれたサーバルキャットの姿は野生味満点で、高く吊り下げられた餌に飛びつくその飛躍力としなやかさには感心したし、客席から歓声もあがっていた。

そして、一番の見物だつたのは、観客に扮したスタッフが客席から巨大なニシキヘビを連れて登場し、一般のお客さんの首に巻きつけるパフォーマンズには、私達だけでなく観客の人々もハラハラ、ドキドキしていたようだつた。

どうして噛みつかないのか、どうやって仕込んでいるのかな？とただ、ただ感心してしまった。

こういうアニマルショーは日本では殆どお目にかかる事がないので、とても貴重な体験だったなあ。

たっぷりショーで楽しんだ後は出口の方へ向かい、出口のすぐそばにある売店に入った。

沢山の動物達のぬいぐるみやペンなどの可愛いグッズが並んでいたの、ゆりも私もゆっくりと時間をかけてお土産を選びたいところだったのだが、私達はツアーで来ていないので急いでタクシー乗り場に並ばなければタクシー乗り場が行列になってしまうと思って、急いでお土産を買うはめに陥ってしまった。

可哀想だけれど「早く、早く！」とゆりを急かしていたら、短時間でお気に入りを見つけてくれたので助かった。

ゆりが選んだのは南国のカラフルなオウムと、夜光塗料で暗いところで光る動物のマグネットを2つだった。ちゃんとお土産下も買えて良かったなあ。

その後は急いでタクシー乗り場へ直行したのだが、拍子抜けするほどガラガラだった。

ゆりを急がせて可哀想だったかな？

タクシーでサファリからシャングリ・ラホテルまでは約\$15弱で到着した。道路が渋滞していなかったの、安かったようだ。

タクシー乗り場を書いてあった相場と同じぐらいの料金で良かった。ホテルには比較的早く午後十時ぐらいに到着したので、ゆりの希望もあり、お茶でも飲もうかとラウンジのロビーコートに入った。

5、 『ロビー・コート』でお茶

このラウンジはハイティーで有名な『ローズ・ベランダ』と共に英国スタイルの素敵なお雰囲気。

シンガポール在住の日本人マダム御用達で、よくハイティーに訪れるらしい。

ウェイトレスの女性はロングスリットの入ったチャイナドレスを身に付けていて、身のこなしも一流の感じだった。

メニューを持って来てくれたので、中を一通り眺めたが、ゆりが食べたいと言っていたようなケーキ類は全く載っていなかった。

昼間ならまだしも、こんな夜遅い時間にケーキなど注文するお客様はいないからだろう。

ラウンジでは皆、ビールやカクテルのグラスを傾けて語り合っていた。

その雰囲気の中、ウェイトレスの女性を呼んで一応ケーキ類があるか尋ねると意外にも、

「ありますよ」という答えが返ってきた。

場違いな私達に、嫌な顔一つせず対応してくれるのだから、シャングリ・ラ・ホテルは素晴らしいなあ。

そのお陰で夜遅い時間 だったけれど、ゆりは念願のケーキと紅茶、私達はコーヒーを注文する事ができた。

少し待っていたら、何やら大きなお皿と、これまた大きなティーポットとカップが一緒に運ばれて来た。

そのお皿は直径が30センチはありそうな大きさで、美味しそうなチーズケーキが乗っていた。

ストロベリーソースが掛けられ、周りにはそのソースで模様が描かれていた。

夜遅くにもかかわらず念願の、しかもこんな豪華なケーキが食べられたので、三人共感激してしまった。

更に感激したのは、そのビッグな、ティーポットだった。お湯を入れる部分の直径が20センチはありそうな大きさで、素敵な模様が描かれていて、見るからに豪華だった。

はしたない思いながらも、思わずポットを持ち上げて下側に書いてあるメーカー名を覗き込んでみると、な、なんとそのティーポットは、ウェッジ・ウッド社製だったのだ。

それは品格がある訳だ。その後私達のコーヒーが運ばれて来たのだが、コーヒーだけ注文したのに、チリチップや、ナッツ類が沢山入った盛り合わせも一緒に付いて来た。

ナッツ類は注文していないので、間違って運ばれて来たのかな？と思ってメニューを見ると、コーヒーにサービスで付けてくると書いてあった。そうかぁ。

サービスと解ると現金なものでパクパクとナッツを摘み、美味しいコーヒーを飲んでゆったりとした時間を過ごした。

メニューに載っていない食べ物も、嫌な顔一つせず何とかしてお客様に提供しようという姿勢は、正に一流ホテルの証だと思った。やはり、シャングリ・ラはその名の通り《桃源郷》だったのだ。

その後は、私達は直ぐに素敵なバスに漬かり、疲れた身体をゆっくりと癒してから眠りに着いた。

第5章

1、トロリーでラッフルズ見物へ

楽しい時間の過ぎ行くのは早いもので、あっという間に4日目の朝を迎えた。

これまでの3日間の疲れも溜まって来たようで、私達3人は朝は早く起きられず、起きたのは午前9時頃だった。

朝シャワーに入りさっぱりしてから、遅い朝食を取りにホテルのレストランへ向かった。

このレストランでは毎日美味しい朝食を頂き、私服の時を過ごしたのに、この朝で最後だと思つと、とても悲しかった。

最後はのんびりと朝食味わおうと決めていたので、ガーデンサイドのテーブルに案内して貰つて席に着いた。

旅行中食べ続けたので、最後の日はサラダやフルーツ中心のあっさりした朝食を食べ、でもレストランの雰囲気や、お料理は存分に味わつて食事をした。

閉店の11時近くまでレストランでのんびりしてから部屋に戻った。

最後の日は何処を観光するか詳しく予定を立てていなかったの、どうしようか、と3人で考えた末、シンガポール航空で頂いた、シンガポルトロリーの三日間乗り放題のフリーパスを利用しようという事になった。

無料サービスだからと、利用しない手はない。 とい
うことで、シンガポルトロリーでシンガポールの街を観光することになった。

お昼過ぎにシャングリ・ラから送迎バスで、まずオーチャードへ向かった。

シンガポルトロリーはオーチャードホテルの前に停車するので、そこから乗車する事にしたのだ。

オーチャードへ降り立つと、外は快晴、この時期はシンガポール

は雨季でスコールがあつても可笑しくない季節なのに、私達がシンガポールへ到着してからはスコール一つ無かつた。

天候にはとても恵まれた旅行だつた。このまま晴天が続けばいいな、と思う反面、一度くらいはスコールでも来た方が、南国らしいかな？と思う気持ちもあつた。

まあ、やはり観光には晴天のほうがいいなあ。

そんな事を考えながら、バス・ストップで待っていたらやって来たのだ。とつても可愛いトロリーが！

ハワイのワイキキトロリーも素敵だと思つていたけれど、車体に素敵な絵が描かれていて、可愛さでは数段上の気がした。

こんな可愛いトロリーに無料で乗車させてくれるなんて、シンガポール航空は気前がいいなあ。

乗車してみると、日本人らしき姿は皆無で（東南アジア系民族自体が殆ど乗っていない）、欧米人、インド人が数組乗つていただけだつた。

彼らも多分SQでやって来た、観光客なのだろう。

車内の案内

は英語と中国語だけだつたが、詳しい路線案内図をトロリーチケットと一緒に貰つていたので、停留所等は直ぐに解つた。

このトロリーはマリーナエリアのサンテック・シティーが始発でシンガポール市内をぐるりと一周して、またサンテックシティーに戻るの、その間の好きなバス停で乗り降りが出来るといふとても便利な代物だつた。

私達は何処で降りるか決めていなかったが、ラッフルズホテルを見たくなくて、ホテルのすぐ近くの停留所で下車した。

ラッフルズホテルの外観はパンプレットや写真で見えていたように、クラシカルな建物で、古き良き時代を彷彿とさせる優雅な佇まいだつた。

中に足を踏み入れると、超豪華という訳では無かつたけれど、やはり歴史を感じさせる優雅な造りだつた。

ホテルのロビーやラウンジには、リッチそうな白人の年配のカップルが比較的多く、古き良き時代には欧米の紳士、淑女の社交場だった様子が想像出来た。

ラッフルズホテルと言えばアーケードが有名だが、この時にはアーケードの事をすっかり忘れていて、見物しなかつのは一寸残念だった。

ホテルを出た私達は再度トロリーに乗車しようと、来た時と同じ乗り場に向かって歩いた。

2、 サンテック・シティーモールは面白い

ラッフルズ近くのバス・ストップからまたシンガーポールトロリーに乗車し、次なる目的地、と言っても歩いて行けそうなくらい近くにある、サンテック・シティーへ向かった。

サンテック・シティーはマリーナ地区にあり、5つのタワー、シヨッピングセンター（専門店街とスーパー・カルフル）、シンガポール国際会議場、富の噴水とからなる複合施設で、風水によって建物が配置されている。

いかにも中国系民族の多いシンガポールらしい発想の建物だ。

最近メジャーになってきた『ダック・ツアー』や『HIPPO BUS』のツアー・チケットはこの中にある、ダック・ツアー・カウンターで購入出来る。

ツアーの集合、発着場所はサンテック・シティーのエントランス近くに、専用の乗り場が設けられている。

ラッフルズホテルからサンテック・シティーは目と鼻の先なので数分で到着。

建物は大きくて近代的、とても立派だった。お洒落で良い感じ。

到着して早速中に入ってみると、中もとても広くて綺麗なシヨッピングセンターだった。

サンテックはオーチャードからは結構離れているので、観光客というよりはローカル中心とガイドブックに書いてあったので、そういうローカル中心のシヨッピングセンターや、スーパーを見物して現地の人々の生活に触れられたら良いな〜という思いがあった。

という事で、いざ物見遊山へ。

早速眺めようと思っていたら、娘から「お腹が空いた〜！」の聲が！

私も主人も朝はたらふく食べたので、あまりお腹が空いていなかったが、仕方が無いので

とりあえず食べ物のありそうな方へと歩いて行った。

一番下の階（これは地下かどうかは覚えていないのだが）へ降りたら、レストランやフードコートが現われた。

シンガポールで初めて見かけたデリ・フランスというカフェや馴染みのあるマックを発見。フードコートも覗いてみたのだが、まず人の多さにびっくり。

お昼時を過ぎていたのに席は超満員。凄い熱気と活気。

切った骨付きの豚肉がぶら下がっていたり、見慣れない食べ物が沢山並んでいたりと、香辛野菜の独特の匂い、なんか此処だけもろ中国という感じの光景だった。

フードコート内は殆ど中華料理のお店で、匂いと熱気がムンムンで一寸苦手だったのでフードコートは退散した。

私的にはデリ・フランスが好みだったのだが、マックに入ってみたいという娘のたつての希望で結局マックへ突入。

メニューは日本と似たような感じだったが、大体のハンバーガーは何かしらとセットになっていて、今一つセットの内容が解りにくかった。

新年を迎えたばかりだったので、記念に干支の縫いぐるみが付いているハンバーガーセットがあり、これと娘の希望のフライド・チキンを何とか注文。

海外のマックは日本と似ているようっていて、メニューとか国によって以外と違って面白い。

この縫いぐるみは良いシンガポールのお土産になった。

席は日本のと同じような感じで、友人同士や家族連れが多かった。

食べてみるとフライドチキンは日本のより油っぽかったが、ハンバーガーは同じような感じ。

でも、あまりお腹が空いていなかったなので結局残してしまったが、シンガポールのマックを満喫する事は出来た。

さて実際にサンテックの中を歩いてみると、店舗数段が相当あつ

て、1日ではとても見切れないぐらいだった。

やはりガイドブックの通り、現地の家族連れや欧米人がとても多くて日本人らしきは殆ど見かけなかった。

そして、フードコートに限らず、モール全体が活気と熱気に満ち溢れていた。

シンガポールではレジャー施設があまりなく、殆どの住民は地下鉄の付近か、車で20分位の距離の所に住んでいるというので、こういう所に気軽に出かけってくるのかな？

それに涼しくて快適、ときたら人々が集まらない訳はないだろう。カルフルは日本に出店している店舗とは品揃えや陳列の仕方が違っていて、品物の色はカラフル、大量に並んでいて、どちらかというアメリカ型のスーパーの感じだった。

時間があればじっくりと眺めたかったのだが。

ダックツアーのカウンターは1階にあり、『HIPPO BUS』等様々なツアーのチケットを販売していて、この辺りは人々でごった返していた。

富の噴水では午後7時半から水とレーザー光線を使つての噴水ショーが行われるとの事だったのでこちらも時間があれば是非見物したいところだった。

このショーを見る事は次回のシンガポールの課題に取って置こう。こういう感じでサンテック・シティーを楽しく見物した。

もし、読者の皆様がシンガポールに旅行される時は、このサンテック・シティーを観光ルートに是非お勧めしたいところ。

サンテックの後は旅行も終盤、DFSで最後にお土産を調達しなければならず、サンテックから出る最終のシンガポール・トロリーに三たび乗車。

このトロリーはかなりクーラーが効いていて、暫く乗っていると冷凍人間になりそうな寒さ。でも何とか上着を着て必死に耐え、観光をしながらオーチャード方面へ向かった。

途中通勤ラッシュで渋滞、オーチャード付近まで30分以上掛

かっ
て
し
ま
い、仕
方
な
く
か
な
り
手
前
の
オ
ー
チ
ャ
ー
ド
・
パ
レ
ー
ド
ホ
テ
ル
の
裏
手
で
下
車
し、徒
歩
で
D
F
S
へ。

じ
じ
く

3、シンガポール最後の夜

旅行の最終日にいつも頭を悩ませるのは、やはり両親や知人へのお土産選びだ。

毎年海外旅行に行き、いつもお土産を皆に渡しているのだから、たまには購入しなくてもいいかな？と思いつつもつい買ってしまっただ。

それにお土産もなんだかワンパターン化してしまう傾向がある。シンガポール旅行は初めてだったので、何度も訪問したハワイよりは目新しいお土産を見かけ新鮮だった。

南国的グッズやお土産というより、シンガポールには中国風やアジアンテイストの品物が多く、特にジム・トンプソンのタイシルク、バティック、マーライオンのデザインされたグッズは目に留まった。

一生懸命考えて悩んだ末、食品はやはり何処の国に旅行しても必ずといっても過言ではないぐらい定番のマカデミア・ナッツ入りチョコ、マンゴーやパイナップルティー等のフレーバーティーが、6缶詰め合わせになったティーセット、そして、パイナップルの形をしていて中にパイナップルジャムの入ったクッキー等を購入。

ばらまき土産にはバティック柄や、マーライオンのボールペン、それぞれ5、6本セット。

更にチャイナ柄の小銭入れをまとめ買い。

娘はカラフルなおウムのような南国バードのぬいぐるみがとても気に入って、それとマーライオングッズ数種類。

自分用には『アン・クライン』の腕時計と全体が小さなマーライオンの柄になっているバッグ、その他、風水を取り入れた干支のネックレスを購入した。

これはネックレスのヘッド部分にぶら下がっている動物が回転するという、ちょっと珍しい物でとても気に入ったのだが、残念ながら

自分の干支は売り切れていて、残っていた何種類かのうち比較的可愛い愛かった、ねずみのヘッドのペンダントを選んだ。

更に母には素敵なシヨールやバティック柄のスカートも購入。主人はなぜかいつも自分用のお土産は欲しがらないので、主人には何か買った記憶がない。

こんな感じで今回もお土産を沢山買ってしまい、お土産代も馬鹿にならなかった。

お土産購入に疲れた私達はDFSの隣の『ロイヤルプラザ・オン・スコッツ』からタクシーに乗り、宿泊している『シャングリ・ラ』に帰った。

最終日も1日遊んで疲れたので、ボタンキューといきたかったが、翌日の午前便で帰国なので休んでいる訳にはいかなかった。

まずはシャワーに入り、休む間も無く荷造りに取り掛かった。

何しろ自分のだけでなく、娘の分も荷造りしなければいけないうえ、お土産も沢山あるのでそれを纏めなければいけないのだ。

いつも海外旅行に持参している、ハワイで購入したキャスター付きのお土産袋に壊れ物以外を押し詰め、荷造りが大体終わったのは午前2時近かった。

娘は先に寝かせていたが、私も早く寝なければと急いでベッドに入り、結局、旅行の最終日なのに余韻に浸る事も出来ず、慌ただしく最終日の夜は過ぎていった

。ちよつと残念。

でもハワイから午前便乗で帰国する場合の、前日の慌ただしさに比べたら、シンガポールからの帰国は、早朝にバゲージだけ先に集めに来たりしないだけ、まだ楽なのかも知れないと感じた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0071c/>

じゃらねっとのシンガポール

2009年5月19日12時00分発行